

地方労働組合評議会 (Central Labor Council) と労働者階級の力

イマニエル・ネス／翻訳・鈴木玲

はじめに
アメリカ労働運動の課題
CLCの歴史と現状
CLCの活性化プログラム
終わりに

はじめに

地方労働組合評議会 (Central Labor Council, 以下CLCと略) は、市や郡などの特定の地域にある組合を組織する機関です⁽¹⁾。CLCの目的は、社会正義と労働者の力を強め、地域の連帯を促進することです。またそのような活動を通じ、新自由主義のもとで肥大している国際金融資本に対抗することを究極的な目標とします。この発表では主にコミュニティ・レベルでの労働者の力を論じます。私は、コミュニティあるいは地域に根ざした労働者の力をいかに大きくしていくかという課題が、今全世界に広がりコントロール不能にみえる新自由主義という現象に対抗していくうえで非常に重要だと思います。なぜなら、労働者が地域レベルで力をつけることが新自由主義に対抗する1つの方策だと考えるからです。

これは偶然ですが、昨日アメリカで中間選挙があり、AFL-CIO会長であるジョン・スウィーニー氏の主要な目標、すなわち連邦議会での民主党の主導権の奪還、が達成されました。CLCの主要な要求・目標の1つは政治的影響力の構築です。今回の中間選挙で特記すべきことは、AFL-CIOが選

* この講演記録は、2006年11月9日に行われた法政大学大原社会問題研究所主催の国際交流講演会でのNess氏の講演 (通訳: 鈴木玲) に基づいたものである。本記録の翻訳者 (鈴木玲) は、読者が講演内容を理解しやすいよう、小見出しを立てるなど内容に編集を加えた。また、説明が不十分の箇所があったので、本報告の末尾に記されている文献やWEBサイトを参考に、若干の補足的説明を本文中および脚注で加えた。本記録は、講演会で使われていたパワーポイント資料の一部を紹介するが、資料の翻訳は高須裕彦氏 (一橋大学大学院社会学研究科フェアレイバー研究教育センタープロジェクト・ディレクター) が行った。

(1) Central Labor Councilの活動内容や機能の分析については、鈴木 (2007近刊) も参照されたい。

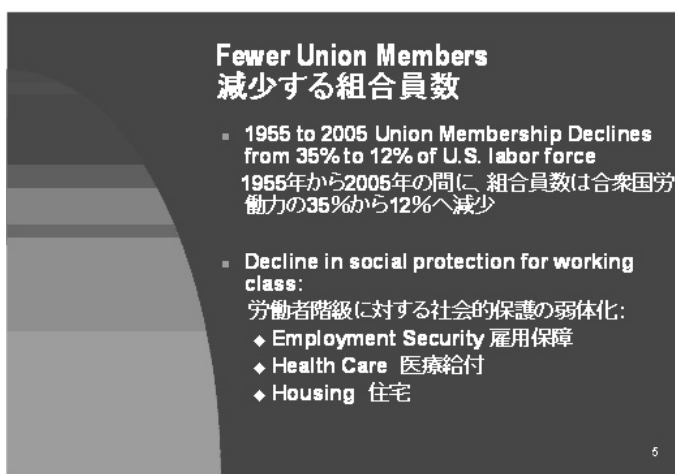
挙対策に費やした資金が前回の中間選挙に比べ少なかったことです。これは、AFL-CIOがCLCを活性化させた結果であると言えるでしょう。

アメリカ労働運動の課題

現在アメリカの労働運動が直面している最も深刻な問題は、組合員数の急速な減少です。多くの人が労働組合の影響力は依然強いと論じているのにもかかわらず、新自由主義政策の直接の結果として、組合組織率は1955年の35%から2005年の12%まで下落しました。組合組織率で測られた労働組合の影響力が低下するのに伴い、アメリカの労働者に対するセーフティ・ネットの衰退もみられました。例えば、健康保険制度を設置する法案は連邦議会で可決されず、また公営住宅プログラムも廃止されました(第1図を参照)。組織率の低下は、このような外的要因とともに、労働運動の内在的要因、すなわち労働組合が新しい組合員を組織化することを怠ったことにも起因します。

組合組織率の減少と労働者階級の力の衰退は、相関関係にあります。フランスのように組織率が低くても労働者階級の力が維持されている国もありますが、アメリカの場合、労働者階級が力をもつためには、高い組織率が必要です。すなわち、組合組織率だけみてアメリカはフランスの労働者階級の力がそれほど違わないという議論は、間違っています。もう1つ重要な点は、労働組合は利益団体ではないということです。多くの「主流」の研究者は労働組合が利益団体だと主張しますが、これは労働運動が何なのかを理解していない見解だと思います。私は、労働組合が主要な社会的勢力であるという立場をとりますが、これは別に「急進的」な立場だとは思いません。

(第1図)



CLCの歴史と現状

現在の形のCLCは、1955年にAFLとCIOが統合したときに設立されました。1935年から55年までのAFL(アメリカ労働総同盟)とCIO(35~38年の間は産業別組合委員会、35~55年の間は産業別

組合会議)が競合した期間は、地域レベルでもCIO系列のローカル組合はAFLのCLCから脱退あるいは除名され、独自の地方組織(IUC[Industrial Union Councils])をつくりました。55年にAFLとCIOが統合したため、地域組織も統合され、現在のCLCが設立されたのです。

AFL-CIOの力は、CLCに根ざしているといえます。なぜなら、全国組織としてのAFL-CIOは全国大会でCLCの投票を通じて意思表示できるからです。大会では各加盟産業別組織は多くの票を投じますが、各CLCも一票を投じることができます。ただし、各CLCが一票しか投じることができないことは、1995年までにCLCの力が弱まったことを物語っています。30年代、40年代の労働運動の高揚期においては、CLC(あるいはIUC)は労働者を直接組織化し、組織化した労働者を適当な産業別組合に振り分けるなど積極的な役割を果たしていました。

アメリカの労働運動では、産業別組合に権限が集中しています。これらの組織は、統制違反のローカル組合を直接管理(trusteeship)したり、組織間の合併あるいは統合を進める権限もっています。また、産業別組合は多くの場合、ローカル組合に対してCLCの運営に協力することを要求します。産業別組合の代表的なものとして次の組織を挙げることができます(第2図参照)。AFL-CIOの方針がCLCに反映されるかどうかは、産業別組合がどの程度協力的であるかに強く影響を受けます。もし、産業別組合がコミュニティ・レベルの組織化に反対した場合、その組合は傘下のローカル組合にCLCへ組合費を払わずに脱退しろと命じることがあります。

(第2図)



ジョン・スウィーニーがAFL-CIOの執行部を握り、Union CitiesやNew AlliancesなどのCLC再活性化プログラムを開始する以前のCLCの状況に触れたいと思います。過去のCLCは、基本的にローカル組合の役員を引退した人あるいは選挙で敗れた人が行くところとみなされていました。CLCは新しい産業で働く新しいタイプの労働者を排除する傾向にあり、運営方法は民主的でなく(多くのCLCが民主的運営の問題を依然抱えている)、またコミュニティ、市、あるいは地域との連帯意識は希薄でした。地域の人びとは、彼らのコミュニティや市にCLCが存在することすら気づかない場合がありました。CLCの主要な問題点は、指導部が新しいタイプの労働者の組織化や戦闘的な運動

を促進することに消極的であったことです (第3図参照)。しかし、CLCに期待されている機能は、さまざまな形態の同盟関係の促進を通じて労働運動の戦闘性を強化することなのです。

労働組合 (具体的にはローカル組合) はいかにしてコミュニティ意識や、組合とコミュニティ間の連帯を確立することができるのでしょうか。多くの組合は排他的傾向をもち、その傾向は建設産業の組合で目立ちます。また、建設産業の組合は多くのCLCで強い影響力をもっています。労働組合にとって重要な課題は、地域レベルに存在するさまざまな組織に注意を向けることです。それらは、若者のグループ、学校、宗教団体、市民団体、新しくアメリカにきた移民などの民族団体、スポーツクラブ、そして人が集まる場所 (とくにショッピング・センター) などを含みます (第4図参照)。

(第3図)

Why CLCs are Inactive in US?
なぜ、CLCは合衆国で活動的でないのか？

- **Exclusion of New Workers in New Industries**
新しい産業の新しい労働者を排除
- **No democracy** 非民主主義
- **Top-Down Organizations**
トップダウン組織
- **No Solidarity with Communities, Cities, and Regions**
コミュニティや都市、地方との連帯が弱い
- **Leaders Oppose Worker Militancy**
指導者は労働者の戦闘性に反対する

8

(第4図)

What is to be Done?
何が実行されるべきか？

- **Labor Unions and Community Must Unite and Forge Mutual Alliances**
労働組合とコミュニティは団結し、相互の連合を構築しなければならない
- ◆ **Local Community Associations**
地域コミュニティ団体
- ◆ **Schools** 学校
- ◆ **Youth Groups** 若者グループ
- ◆ **Religious Institutions** 宗教団体
- ◆ **Civic Organizations** 市民組織
- ◆ **Ethnic Associations** 民族団体
- ◆ **Sports Clubs** スポーツクラブ
- ◆ **Shopping Centers** ショッピングセンター

9

CLCの活性化プログラム

2005年はアメリカの労働運動にとってどん底の年でした。AFL-CIOの分裂により、労働運動全体が瓦解するようにみえました。AFL-CIOとChange to Win Coalition (CTW) が分裂した後、皆はCLCも分裂するのではないかと考えていました。しかし、興味深いことにCLCの分裂は起きませんでした。AFL-CIOは、CTW系の組合のローカル組合が組合費を払い続ける限りCLCへの加盟を認めました。さらに、地域レベルの組合間の協力関係は分裂以前より強まり、過去数年間のCLCの再活性化の動きは継続しています。このようなことから、今回のAFL-CIOとCTWの分裂はやや「人工的」(artificial)なものだといえます。

Union Citiesプログラム(キャンペーン)について話したいと思います。Union Citiesキャンペーンの目標は、CLCを労働運動の経済的・政治的な力の中心として再活性化することです。AFL-CIOはこのプログラムに参加するCLC⁽²⁾に対して、多くの活動を行うことを要求します。第一に、企業の政治的権力を弱め、責任ある企業活動を行わせることです。第二に、未組織労働者の組織化や社会運動との結びつきの構築だけでなく、教育、住宅問題、健康保険、環境問題等の社会福祉に関しても目標を設定することです。例えば、労働者やコミュニティの利益を考慮した生産あるいは開発モデルを促進する必要があります。第三に、公共部門を再活性化して、公共支出の使い道に対して発言することです。公共部門の再活性化のためには、CLCは地方議会選挙の際に候補者を推薦するだけでなく、推薦候補者が当選した後も議員が民営化政策に賛成しないように圧力をかけ続ける必要があります。第四に、労働者階級を教育して活動家を養成することです。とくに、アメリカ社会における企業の強大な権力の問題についての教育を行わなくてはなりません。そして、第五に、特定の地域の労働組合が争議や組織化活動などで相互支援できるようにすることです。

CLCの活動やUnion Citiesプログラムで依然取り組みが不十分な点は、労働者を支援するための近隣ブロック組織や労働者居住地域の再開発(gentrification)問題に関する労働者組織を結成するなど、具体的な行動を実施することです。労働組合は労働運動と住民運動間の対等な相互関係モデル、すなわちコミュニティを基盤とした連帯モデルを取り入れなくてはなりません。

歴史的にみると、CLCは地域を基盤として多くの活動を行ってきました。例えばCLCにより組織された失業者評議会の活動は、1930年代に絶頂期をむかえました。この評議会は、大恐慌で職を失い家賃が支払えずアパートから追い出されそうになった労働者とその家族を支援する活動をしました。私は、失業者評議会をつくることをニューヨーク市のCLCに90年代の初めに提案したことがあります。

私はニューヨーク市のCLC(New York City Labor Council)の変革に実際に関与したので、具体的な事例として紹介します。私を含めた多くの人々は、ニューヨーク市CLCの組織化を活性化させるための努力を行いました。われわれが当初行った試みは失敗に終わりました。ニューヨーク市

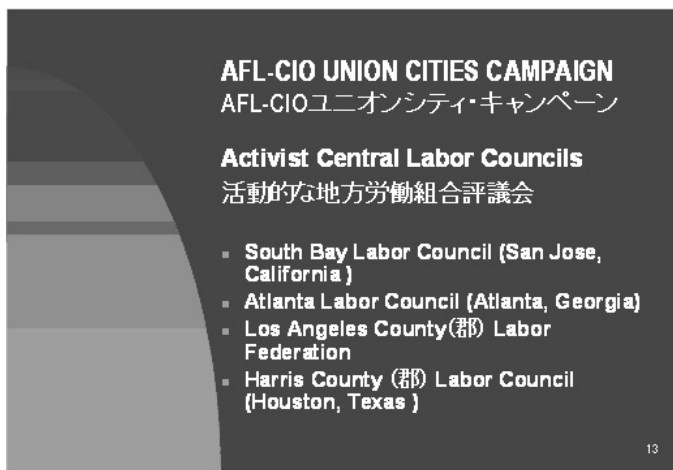
(2) Union Cities プログラムに参加するのは、一定の条件を満たしたCLCである。プログラムは96年末に始まり、98年時点でプログラムに参加したCLCは約150(全体の約4分の1)であった(Kriesky, 2001)。

CLCはレトリック上では移民・移住労働者の組織化を強調したものの、実際には（それらの労働者が多くを占める）日雇い労働者の組織化に関心をもっていませんでした。

ニューヨーク市CLCは新しい組織化担当部長を採用しました。その部長は、地域を基盤とした労働者の力を構築するために非常に戦略的な考えに基づいて行動し、彼の努力は実際に成功に結びつきました。彼は、労働者を効率的にキャンペーンに動員することができました。また、彼は労働者の権利を蹂躪している未組織企業に対するキャンペーンの戦略策定の際、私たちの提案を聞き入れました。私は、ニューヨーク市CLCがいろいろな組合のオルグを集めて開いた数多くの会議によく参加したものでした。このような活動により、基本的には非民主的な労働組織内部に民主的なプロセスをつくることができました。なぜなら、これらの会議に多くの人びとが参加し、CLCで一定の発言力をもったからです。この組織部長はとても効果のある活動をしたために、皮肉にも幹部から解雇されてしまいました。なぜなら、彼の影響力は彼の保守的な幹部の立場を脅かすようになったためです。このように、ニューヨーク市CLCの事例は、CLC自体の失敗というより指導部の失敗であり、労働者がお互いに連帯する意欲を実際にもっていることを示しました。

Union Citiesキャンペーンなどにより、活性化に成功したCLCの4つの事例に触れたいと思います（第5図参照）。カリフォルニア州サンノゼにあるSouth Bay Labor Councilは、活性化に成功したおそらく最も有名な事例です。サンノゼは、シリコンバレーの中心部に位置する都市で、多く的人是はサンノゼに住む人は非常にお金持ちだと考えています。しかし実際には、電子産業に低賃金で働いている多くの日雇い労働者、移民労働者がいます。さらに生活コストが高いため、多くの労働者はガレージで暮らしています。South Bay Labor Councilは、組織労働者の課題だけでなく、地域に住む労働者が抱える問題を明らかにすることに関心を向けました。これは、重要なポイントです。なぜなら、このCLCは加盟しているローカル組合を超えた領域に活動範囲を広げたからです。例えば、South Bay Labor Councilは雇用事務所(Hiring Hall)を設置し、この事務所を通じた職業紹介により地域に一定の労働基準を設定することができました。この雇用事務所を通じて、労働者は日や週単位の仕事あるいは派遣労働の仕事を見つけます。さらに、このCLCは充実した調査機能もっており、地域のさまざまな問題に関する調査を実施しています。

(第5図)



次に紹介するのは、ジョージア州アトランタのAtlanta Labor Councilの事例です。このCLCの活性化は96年末にUnion Citiesキャンペーンのスタート前から始まっていました。アトランタはアメリカ南部の中心都市の1つであり、組合組織率は公務部門を含めても5%しかありません（全米では公務部門を含めて13%）。また、ジョージア州は「オープンショップ」の州（いわゆる「働く権利」を認めユニオンショップを違法化した州）です。このCLCは、1996年に開かれたアトランタオリンピックのスポーツ施設の建設に従事した労働者すべてを組織化しました。組織化をするために、CLCはデモを次々に組織して、オリンピック組織委員会やオリンピックのスポンサー企業に対して圧力をかけました。CLCが組織したデモはアトランタだけでなく、全国レベル、さらには海外でも報道されて広く知られるようになりました。スタジアム、野球場、プールなどの施設の建設が完了すると、今度はこれらの施設で働く労働者（例えば売店で働く労働者）が組織化されました。これは、Atlanta Labor CouncilがStewart Acuff氏の指導のもと、これらの施設を運営する団体と「継承協約」(successor-ship agreement)を結んだことによります。この協約には、施設で働く労働者が組合承認選挙を経ないで組合を結成する権利をもつ条項が盛り込まれました。Acuff氏は、現在AFL-CIOの組織部長です。

もう1つの事例として、Los Angeles County Labor Federationの活発な組織化をあげます。ロサンゼルスには低賃金で働く移民労働者が住んでいます。ロサンゼルスのCLCはこれらの労働者を組織化するために、SEIUなどの労働組合だけでなく、移民団体など通常はCLCと関係をもたない組織にも接近しました。また、CLCはロサンゼルス国際空港で働く労働者の組織化を、LAANE(Los Angeles Alliance for a New Economy, リビング・ウエイジ〔生活賃金〕キャンペーンの推進を中心に活動する組織)への支援を通じて行いました。さらに、1998年にCLCはSEIUと協力して7万4000人の在宅介護労働者の組織化に成功しました。

最後に、テキサス州ヒューストンのHarris County Labor Councilの事例を簡単に触れます。このCLCは、いわゆる「ブッシュ王国」の中心都市にあります。そのため、誰もがこのCLCが効果的な活動をするを予測しませんでした。しかし、Harris County Labor Councilの活動により、リビング・ウエイジ条例が可決され、ヒューストンの最低賃金が引き上げられました。

次に、New Allianceプログラムの事例としてニューヨーク州について触れます。ここでは、州のAFL-CIOがNew Allianceプログラムを促進し、労働運動の地域における力は強まりました。New Allianceプログラムは、地域労働運動の構造を変革する試みで、これに対して多くの反対意見ができました。なぜなら、このプログラムはCLCをより広い地域を単位に再編することを目指しているからです。反対意見をもつ人は、労働運動が近隣の地域により焦点をあてる必要があるのに、その流れに逆行していると論じます。しかし、ニューヨーク州に25あったCLCを再編して結成された5つのArea Labor Federation(ALF)は、リビング・ウエイジ条例の可決や最低賃金の引き上げなどで非常に効果的な活動をしています。さらにALFは、州都で組織された数多くのデモを通じて、より多くの予算が貧しい人々の生活を改善する政策に使われるように州議会に圧力をかけうることに成功しました。New Allianceプログラムによる地域労働運動の再編は全米で行われていますが、ニューヨーク州の事例は再編がより効果的な地域労働運動に結びつくことを示しています。

サンノゼ、アトランタ、ロサンゼルス、ヒューストン、マイアミ、デンバー、クリーブランド

など諸都市のCLCの活動をみると、ある共通性が見出せます。それは、これらの都市のCLCがかつては弱い組織だったため、CLCの変革に対して加盟組合からの抵抗が少なかったことです。ニューヨーク、シカゴなど組合組織率が高い大都市の場合、CLCの変革に対して加盟組合から抵抗がありました。影響力がかつて弱かったCLCでは、保守的なリーダーが引退した後、社会運動出身の活動家が空白を埋めました。例えば、アトランタのCLCのリーダーであったStewart Acuff氏は、かつてACORN（the Association of Community Organizations for Reform Now, 全米最大のコミュニティ組織）のオルグでした。このようにCLCが長い間不活発であったところでは、空白を埋めた若い世代のリーダーが目に見える形でCLCの活動を活発化させています。

CLCが行っているコミュニティを基盤としたキャンペーンや運動を例示すると、開発業者による労働者階級居住地区の高級住宅地化の反対運動、社会サービスの民営化に対する反対運動、公正な経済発展を求める運動、リビング・ウエイジ条例を要求するキャンペーン、組合に加盟していない移民やマイノリティ労働者に対する支援を行う“Workers Center”の設立などです（第6図参照）。

（第6図）



終わりに

私はかつてのCLCを描写するのに「恐竜」という比喩を使いますが、それは実際にかつてのCLCが恐竜のように「無用の長物」であったからです。そして、残念なことに、CLCの多くが依然この状態にあります。しかし、これまでみてきたように一部のCLCが新たな力を蓄えています。私は自分自身がオルグとして活動してきた経験から、労働者が連帯意識を常にもっていると確信もっています。連帯意識は、労働者に対してより良い条件の賃金や健康保険を得られる希望を与えることで勝ち取らなくてはなりません。希望は変革の原動力になります。もし労働者がそのような考え方を共有しなければ、組織化キャンペーンは成功に結びつきません。なぜなら、勝利するという希望がもてなければ、家族をもつ労働者は敢えて仕事や生活を犠牲にして闘わないからです。

私は、組織化キャンペーンにおいて、労働者あるいは労働運動内部での自発性が重要だと考えま

す。スウィーニー執行部のなかには、トップダウンの組織化手法を支持する考えがあります。具体的には、エリート大学を卒業したての若い頭の良いオルガナイザーを、落下傘兵のようにキャンペーンの行われている都市に投下させるという考え方です。私は、このようなモデルに否定的です。なぜなら、このようなオルグは短くて数週間、長くて1～2年その都市で活動したのち、そこを去ります。そこには、コミュニティ自体から自発的に生まれる本当の意味での組織化はありません。組織化に必要なのは、いわゆる「パラシュート・キャンペーン」ではなく、地域で長期的に活動するオルガナイザーです。エリート大学の卒業生は、組織化を行うのに最適な人びとではありません。なぜなら、彼らはオルグの体験を数年間した後、医者や弁護士などエリートの仕事につく場合が多いからです。労働者は自分自身で組織化することができます。労働者は知性を持ち、組織化に伴うリスクを理解しています。労働者は支援が具体的で本物であると判断したら、組織化キャンペーンに積極的に参加します。なぜなら、労働者はキャンペーンが自分たちの力を強めるものだと感じるからです。

(Immanuel Ness ニューヨーク大学政治学部教授)

(すずき・あきら・法政大学大原社会問題研究所准教授)

【参考文献等】

- Acutt, Stewart. 2001. "The Atlanta Labor Council: Building Power Through Mirroring Membership." In Ness, Immanuel and Stuart Eimer, eds., *Central Labor Councils and the Revival of American Unionism: Organizing for Justice in Our Communities*. Armonk, New York: M.E. Sharpe.
- Gapasin, Fernando E. 2001. "The Los Angeles County Federation of Labor: A Model of Transformation or Traditional Unionism?" In Ness, Immanuel and Stuart Eimer, eds., *Central Labor Councils and the Revival of American Unionism: Organizing for Justice in Our Communities*. Armonk, New York: M.E. Sharpe.
- Kriesky, Jill. 2001. "Structural Change in the AFL-CIO: A Regional Study of Union Cities' Impact." In Turner, Lowell, Harry C. Katz, Richard W. Hurd. Eds., *Rekindling the Movement: Labor's Quest for Relevance in the Twenty-First Century*. Ithaca: ILR Press.
- Ness, Immanuel. 2001. "From Dormancy to Activism: New Voice and the Revival of Labor Councils." In Ness, Immanuel and Stuart Eimer, eds., *Central Labor Councils and the Revival of American Unionism: Organizing for Justice in Our Communities*. Armonk, New York: M.E. Sharpe.
- 鈴木玲 (2007近刊) 「地域労働運動の日米比較：地方労働組合評議会と地区労・地区連合会の事例に基づいて」『国府台経済研究』第19巻3号 (千葉商科大学経済研究所)。
- Zieger, Robert H. 1986. *American workers, American unions, 1920-1985*. Johns Hopkins University Press.

【参考WEBサイト】

New York State AFL-CIO Website <http://www.nysaflcio.org/>